



聞き書き研究会は、江戸川区を愛し、江戸川区で強く逞しく生きた女性の姿を聞き書きとして残すため、江戸川区女性センターの区民ボランティアが2010年に始めた活動です。女性センターは2020年に人権・男女共同参画推進センターに統合され、この活動を所管しています。

## 「子どもたちが教えてくれた」 — 子育てから障がい者支援のボランティアへ —

なみ き はつ え  
並木初江

1951年(昭和26年)  
一之江生まれ  
船堀在住



### 銀行員になる

わたしは、昭和26年(1951年)に一之江で生まれました。弟がいます。父は会社員で、母が農業をしていました。母の両親が早く亡くなり、4人姉妹の一番下だった母が農家を継いで、米と野菜を作っていたんです。会社員の父が家に帰ってくると、野菜を京葉交差点そばの市場まで運びました。わたしたちも、単車や自転車の後ろに付けたリヤカーに乗って行きました。市場で野菜を並べる手伝いをした思い出があります。

一之江小学校の5・6年生の時に、自分で野菜を近所に売りに行くことがありました。同級生の家では、お母さんたちが子どもの友だちだからといって、たくさん買ってくれるんです。野菜を売っている自分を同級生に見られるのが恥ずかしいのと、早く売って帰りたいというのとで、なんか複雑な気持ちでした。

父はわたしを、短大のある昭和学院に中学から入れました。短大に行かせるつもりだったようですが、高校を卒業後、日本銀行に就職しました。昭和学院の優秀な先輩がいたので、毎年求人募集が来ていたのです。昭和44年(1969年)、わたしが勤め始める頃に、東西線の葛西駅ができて、一之江から葛西まで出て東西線で日本橋へ。市中銀行から来たお金を数えたり、調べたりしました。お金を数えるときに白衣を着ていたんです。当時は、お札を機械でなく手で数えていました。手触りで紙質の微妙な違いがわかるんです。偽札を見つけることもあったし、沖縄返還(昭和47年)が間近になった頃にはドル紙幣も数えました。3年間でしたが、結構楽しかったですね。和裁やお花、花嫁修業もしました。近くの東急デパートに辻料理教室があったので、仕事帰りに同期生と通いました。



◆銀行の前で(中央)

### 次女が生まれて

結婚が決まって、昭和47年(1972年)に日本銀行を退職しました。結婚したら辞めるというのが当たり前だったので、船堀にある実家の鉄工所に入りました。そこで、主人の親と同居しました。

翌年に長女が生まれ、年子で次女の利恵が生まれました。早産で1,920gの未熟児でした。もしかしたら障がいが出るかもしれないと言われ、ちょうどその病院に来ていた日大の先生に、日大病院へ連れて行かれて、保育器で育ちました。

病院に通っていると、だんだん様子が違うじゃない。年子の長女がいたから、発育が違うなどわかりますよね。いろいろ検査もして下さったけど、はっきりした病名を言ってくれる先生もなくてね。北区にある東京都立北療育医療センターを紹介され、そこで初めてその院長先生が病名を教えてくださいました。脳性麻痺だって。

病名を言われても、どんな病気か、これから先どうなるのか、頭が真っ白でした。ただただ、必死に家に帰ってきただけ。それまで、わたしの身近に障がい者がいなかったでしょ。医学書で調べてもよくわからない。運動機能に障がいがあるとと言われても、どういうことかさっぱり。だから、リハビリに来て下さいって言われてから実際に行くまで、数ヶ月経っていました。長女を連れ、次女の利恵をおぶって、錦糸町へ出て、秋葉原で京浜東北線に乗り換えて王子駅で降りて、そこからバスで北療まで。電車の混んでいる時間帯だったから、大変だった。小さいうちにリハビリしたほうが良いというので、長女を保育園に入れて、週1回のリハビリに通いました。

3歳頃に、「家庭で(かわいそう、かわいそう)では何もできなくなるから」と言われて、自分のことは自分でできるようにと、6歳まで北療に入れました。親が行った時は、それぞれ自分のお風呂に入れて体を洗ったり服を着せたりもします。子どもたちはみんな、親の来る日を楽しみにしてるわけ。

昭和57年(1982年)、利恵は船堀小学校に入学しました。その頃は障がいのある子の入学は珍しかったですね。

それでも前年が、「国際障害者年(1981年)」だったので、世の中の障がい者への見方が少しは違ってきたのかな。校長先生が全校生徒に「今年は車椅子に乗った子が入ってきましたので、みなさん気をつけてあげてくださいね」と言ってくれたんです。登校班というのがあって、うちの班が利用する学校の西門のスロープから教室までの階段を、みんなで車椅子を持ち上げてくれました。

子どもって、いろいろ偏見はあっても、話をしていくと理解しようとしてくれるんですよ。5年生の時の日光林間学校は、「山を歩くから連れて行けない」と言われたけど、6年生の時は、クラスの子たちが「自分たちが車椅子を押すから、一緒にいきたい」と言ってくれて、わたしも一緒に行くということで参加したんです。

## たくさんの方を教わりました

利恵が小学校の時に、「駄目でもいいから、取りあえずやってみよう、駄目だったらしょうがない」という、若くて一生懸命な先生がいてね。「ああ、そういうふうにするんだ」と思って、わたしもすごく勉強になりました。4年生の時には、ある先生が「子どもたちを育ててきて、何か世の中の役に立つことをやらなければいけないと思って、献血をしている」ということを聞きました。その時、わたしも落ち着いたら、自分だけ一生懸命にするのではなく、誰かのために何かやろうと思ったんです。

利恵は、中学・高校とスクールバスで江戸川養護学校(現:東京都立鹿本学園)へ通っていました。高校の先生は、生徒に電車やバス、タクシーに一人で乗ることをやらせたりするんです。地図と住所とお金を持たせて「ここまで行きたいんですが、乗せてください」と。わたしなんか、「そんなことができるはずがない」と先生に言ったんだけどね。先生は自分で生活できるようにと一生懸命だったのね。わたしはそっと利恵の後をついて行きました。下車駅で降りることができなかつたときには、つい口出しを。その時、親って「この子は、これはできない」と決めつけることがあるんだけど、「やらせるチャンス」が必要なんだな、それは他の人とかわかることでできるんだなあと思いました。

卒業しても、利恵の働く場所がないので、障害者施設を探して通いました。そこではお母さんたちが集まって袋物を縫ったり、パンやケーキなどを作って、江戸川区の区民祭りや江戸川養護学校の夏祭りのバザーに出して活動資金の足しにしました。

## ガイドヘルパーのボランティア

利恵が高校生になったころ、わたしはガイドヘルパーのボランティアを始めました。「障がいのある子どもがいるとボランティアは難しいのでは」と言われたけど、そんなときは障がいのある子どもがいるからわかることもあるんです、というようなことを言っていました。

わたしの母は、母親が産後まもなく亡くなって、おばあちゃんに育てられたんです。年寄りだから物を大事にするとか、かわ

いそうな人や大変な人に優しく接してあげるとか、おばあちゃんからそういうものを受け継いで育ってきたね。そういう母が、実際に人の世話をしているところを見て育ったから、わたしもからだが不自由な人に対して、違和感は無かった。それこそ養護学校の先生になりたいと昔は思っていたのね。わたしのボランティアへの動機にもなっているかな。

家では、利恵の弟も姉を支えているし、主人も長女も協力してくれます。主人は小学校のPTAの副会長に空きができた時、率先して引き受けたわけ。校長先生と親しくなれば、先生とは違う立場で何かの時に手助けできるって。その後は会長もやりました。そういう形で協力してくれました。

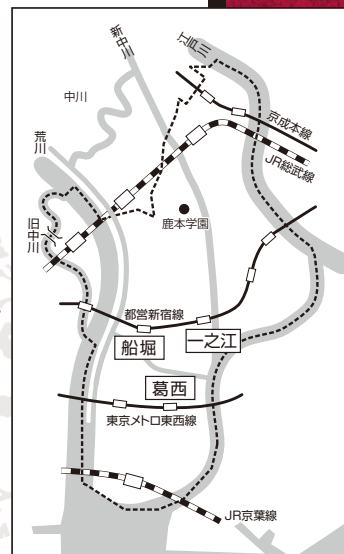


◆出前ボランティアで雨の日のガイドヘルプの説明をする

ガイドヘルパーは視覚障がい者の外出をサポートします。わたしは江視協(江戸川区視覚障害者福祉協会)から派遣されて、買い物や病院などに付き添います。目が見えないと何もできないと思うかもしれませんが、何でもできます。その人なりに工夫してやっています。障がい者が積極的に外出することによって、何が不便なのかをたくさんの人に理解してもらえようになり、みんなが暮らしやすい社会になるのだと思います。

利恵は今、支援ハウス(江戸川区立障害者支援ハウス)へ週2回行っています。バスで迎えにきてくれて、希望者にはりハビリや入浴もさせてくれます。また、お菓子づくりやパソコン、歌や楽器、工作、ストレッチなど、毎回違ったことをします。施設で友だちや職員と話したりしますので、利恵は支援ハウスに行くと元気になって帰ってきます。

今、わたしと利恵、わたしの友人と3人で、「読み聞かせ」のボランティアをしています。最初は白鷺特別支援学校(東小松川4丁目50-1)で、それから船堀小学校の「あすなろ学級」(特別支援学級)で。「あすなろ学級」の子どもたちは、車椅子の利恵を気にせず受け入れてくれます。子どもたちが、利恵の車椅子を押したがるので、簡単な車椅子の扱い方を教え、見守りながらやってもらっています。子どもたちにとっても、実際に障がいのある人を見て、接して、話を聞くというのは大事よね。利恵も、人前で話すようになって声も出るようになり、楽しくやっています。わたしも障がいのある方たちの話を聞いたり、いろいろな経験ができて、たくさん元気をもらっています。



- ◆インタビュー/2022年1月  
2022年3月  
2022年5月
- ◆聞き手/山本國子、岡西和子、小宮和枝
- ◆コーディネーター/樋口政則